

長野県革新懇ニュース

2016年2月号
(発行日2月10日)
年会費5000円(送料込)
振替 0510-3-15971

200

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: takamura.hiroshi.nagano-h@educas.jp

革新懇の3つの共同目標

- ①日本の経済を国民本位に転換し、暮らしが豊かになる日本をめざします。
- ②日本国憲法を生かし、自由と人権、民主主義が発展する日本をめざします。
- ③日米安保条約をなくし、非核・非同盟・中立の平和な日本をめざします。



左側: 早瀬友佳子さん。1976年、名古屋市生まれ。自然に憧れた夫とともに、2000年に上田市に移住。夫婦、2男、1女の5人家族。現在、女性団体事務局員。

右側: 杉崎美幸さん。1975年、長門町(現長和町)生まれ。小学生のときに一家で埼玉に転居。田舎に憧れ、再び長野県に戻り、東御市在住。夫婦、2男の4人家族。現在、東御市の福祉施設の支援員。

だれの子どもも殺させない

早瀬友佳子さん、杉崎美幸さん

(安保関連法に反対するママの会信州)

何か行動しよう

Q 行動に立ち上がった経緯をお聞かせください?

杉崎 実は、数年前までは社会問題にそれほど大きな関心があったわけではあり

ません。ただ、私の父が福島県のいわき市の出身だったものですから、東日本大震災と福島原発事故が起きたときには大変な衝撃を受けました。親戚も沢山あり、地震による被害に加え、福島原発から40kmしか離れていなかったため放射能汚染の影響も大きく、大変なことになったと言葉では言い表せない恐ろしさを感じました。放射能汚染については県内でも検出されたので子どもへの影響を心配し、食べ物よりもより野外で遊ぶことにも神経を尖ら

せました。ところが、深刻な被害が改善されていないにもかかわらず、早くも原発再稼働を急ぐ政府の姿勢に憤りをもったし、政治への不信が募りました。

そんな折、昨年2月に長和町で開かれた小集会にたまたま参加したんですが、そこで戦争法の問題や雇用の問題などが話され、原発以外にも大変な事態がすすんでいることを知り、それを契機に急速に政治のあり方について関心をもつようになりまして。特に戦争法については、日本が戦争に巻き込まれるのではないかと、子どもたちが戦地に行くことになるのではないかと、そんな危機感をもちました。そんな中で7月に全国のママの会が立ち上がったことを知り、地元でも何かできないかと考えたんですが、なにしろ経験がまったくなかったので、暗中模索の状態はどうしようかと迷っていました。

そうしたら丁度、長野で今井紀子さんが行動を起こしていることや、上田でも中村あきさんたちが「なないろアクション」に取り組んでいることを知り、また、松本の神津ゆかりさんにも声をかけ、そのお皆さんと一緒に「安保関連法に反対するママの会信州」を立ち上げました。そしてお互いに連絡をとりあって長野や上田のスタンディングやデモに参加しました。地元でも「平和への命をつなぐ東御市民の会」が8月9日に集会を開くということで誘われ、実行委員も引き受け、自分なりに行動するようになりました。

一人でスタンディング

強行採決された9月19日には居ても立ってもいられなくなつて、東御市の交差点で一人でスタンディングを始めました。ツイッターやフェイスブックで知り合いにも呼びかけ、その日は3人でした。19日からは5連休だったので、翌日も同じ場所です。3日目からは上田市の大屋交差点に場所を移し、3日連続でスタンディングしました。ツイッターなんかでどんどん拡散したせいか、最終日の23日には35人の皆さんが参加しました。同じ思い、怒り、危機感を持っている人が沢山いることを知り、本当に励まされました。それ以降、毎月、大屋交差点でスタンディングして、戦争法の廃止を訴えています。

早瀬 私は、政治や社会野問題についてはある程度関心は持っていたんですが、秘密保護法が成立したあたりからいつそう危機感を強めるようになりました。2014年7月の集団的自衛権行使容認の閣議決定などの動きをみていて、あまりにも酷い一方的なやり方に強い怒りを感じましたし、子どもたちが戦争に行くようになるのではと強い切迫感を感じました。一応60年安保のことは知識としては知っていましたが、そんな経験はないわけですから、どうしたらよいか思案し、悶々としていました。できれば同世代の人にも伝えて行動を起こしたいと考えていたのだ、丁度その頃、上田で「なないろアクション」が始まったことを知り、すぐさま参加し、その中でいろいろな人たちと知り合

いになり、一緒に行動するようになった。強行採決があった19日は、母の葬儀が愛知であったので帰省していたんですが、杉崎さんからの連絡を受けて、私もいろいろな人に知らせ、行動に参加するようお願いしました。杉崎さんが一人で始めた行動が、ツイッターなんかのSNSを通じてどんどん広がったんだと思います。参加者の中には、結構年配の皆さんもいたんですが、こういう皆さんには口コミで情報が広がっていったようです。このスタンディングは10月以降も毎月続けていて、この行動には長野から田沢さんや板本さんなどもわざわざ駆けつけてもらっています。

子どもの未来が危ない

Q あらためて行動の原点は何でしょうか?

杉崎 私の場合は、やっぱり子どものことですね。子どもが将来、戦場に駆り立てられるような世の中にはしてはいけない。この思いが一番強いんです。戦争法だけではない、子どもに大きな影響を与えるようなことについては敏感になります。福島原発事故による放射能汚染の問題や、食べ物に含まれているいろいろな化学物質のことなどについても関心をもちますね。

本格的に動き出したら大変なことになるといって強い気持ちです。「誰の子どもも殺させない」というママの会のスローガンはやっぱり母親の発想から生まれたものだと思います。ただ、母親の場合はやはり子どもとの関係が大きいと思います。戦争法に反対する、あるいは行動する原点というのは人それぞれだと思っています。シルズの皆さんにはあの世代の独自の接点があるだろうし、年配者の皆さんについても同様だと思います。

最近つくづく思うんですが、政治のあり方が私たち一人ひとりの生活に直結しているな！と！戦争法で自衛隊員が殺し殺されるのが現実になることにならなければ、日本国内でテロが起きて犠牲者が出るかもしれない。原発再稼働すれば、第2の福島が生まれる危険性が確実に高まります。消費税についても暮らしを直撃するわけです。だから、政治の問題は縁遠い問題ではない、私たちに密接にかかわっている、そういうことをどれだけ多くの人に知ってもらえるかが本当に大切だと思います。

気楽に分かり易く

Q 取り組みの困難さはありませんか?

早瀬 率直に言って、政治の話はちょっとという感じはまだまだあります。ちょっと親しくなった人に戦争法の話をする、「すごいねー」と言うんですが、ちよつと引いた感じで、距

【2面に続く】